

## 研 究

放課後児童クラブにおける作業療法士の  
コンサルテーションの効果研究森川 芳彦<sup>1)</sup>, 花岡 彩<sup>2)</sup>, 吉村 学<sup>2)</sup>, 西田 智子<sup>3)</sup>

## 〔論文要旨〕

**目的**：本研究では作業療法士（以下，OT）が放課後児童支援員（以下，支援員）に対してコンサルテーションすることによって，発達の気になる子どもの感覚面の偏りや問題行動，目標到達度の変化について比較し効果を明らかにする。

**対象と方法**：対象は放課後児童クラブ（以下，児童クラブ）に所属する15人を対象児とした。OTが児童クラブに対して6か月間に約2か月に1回の頻度で合計3回訪問した。日本版感覚プロフィール短縮版（以下，SSP），日本語版アイバグ子どもの行動評価尺度（以下，ECBI），ゴール達成スケーリング（以下，GAS）をアセスメントの指標とした。OTのアドバイスに基づき支援員が保育を実践し，OTが再評価を行った。

**結果**：コンサルテーション開始時と終了時の比較では，SSPの合計点は終了時が有意に低下した（ $p < .01$ ）。ECBIの強度Tスコアと問題Tスコアにおいても終了時が有意に低下した（ $p < .01$ ）。GASのT値においては終了時に有意に上昇を認めた（ $p < .01$ ）。

**考察**：OTが対象児の問題行動の原因を解説したり目標の明確化を図ることで，支援員は対象児の特性に合わせた保育ができ，対象児の感覚面の偏りや問題行動が軽減し，目標到達度も向上したと考えられた。

**結論**：OTが支援員に対してコンサルテーションすることは有効であると考えられた。今後，対象児童数を増やしランダム化比較試験を検討する必要がある。

**Key words**：放課後児童クラブ，コンサルテーション，発達障害，作業療法士

## I. はじめに

放課後児童クラブ（以下，児童クラブ）とは，放課後児童健全育成事業を行うところであり，厚生労働省の運営指針<sup>1)</sup>によると，小学校に就学している子どもであって，その保護者が労働等により昼間家庭にいないものに，授業の終了後に児童厚生施設等の施設を利用して適切な遊びおよび生活の場を与え，子どもの状況や発達段階を踏まえながら，その健全な育成を図る事業であるとされている。その児童クラブにおいて，障害児の受け入れクラブ数および児

童数は年々着実に増加している。厚生労働省の統計<sup>2)</sup>によると，平成28年には，12,926クラブ，33,058人となっている。障害児受け入れクラブ数は，平成15年の調査開始時と比較して約3.2倍，障害児数は，平成16年の調査開始時と比較して約3.6倍に増加している。また，小林ら<sup>3)</sup>は，岡山県内の児童クラブの在籍児童総数に対する障害をもつ児童数の比率は8.68%であり，なかでも発達障害が7.05%であると報告している。国の対策として，障害児を受け入れる児童クラブには，個々の障害の程度等に応じた適切な対応が必要であることから，専門的知識等を有する放課後児童

Effectiveness of Consultation by an Occupational Therapist in an After-school Children's Club

[3227]

Yoshihiko MORIKAWA, Aya HANAOKA, Manabu YOSHIMURA, Tomoko NISHIDA

受付 20. 4. 9

1) 専門学校川崎リハビリテーション学院作業療法学科（作業療法士）

採用 21. 5. 7

2) 川崎医科大学附属病院リハビリテーションセンター（作業療法士）

3) 香川大学教育学部（小児科医師）

支援員（以下、支援員）を配置するために必要な経費を上乗せ補助している。しかし、その対策が十分に機能していないことが、平成28年度岡山県備中県民局協働事業の報告書においても述べられている<sup>4)</sup>。平成29年度の同事業を活用して、岡山県学童保育連絡協議会から岡山県作業療法士会に派遣依頼があり、作業療法士（以下、OT）が児童クラブでコンサルテーションを行うことになった。OTが地域にてコンサルテーションの効果を検証した研究として、山口ら<sup>5)</sup>は幼稚園や保育園でのコンサルテーション型作業療法の効果検証に向けて、介入前後比較を試験的に実施し、カナダ作業遂行測定（Canadian Occupational Performance Measure：COPM）の遂行度および満足度の向上、Goal Attainment Scalingの目標到達度に有意な改善がみられたが、General Self-Efficacy Scaleに有意差は認められなかったと報告している。また、引野ら<sup>6)</sup>は小学校通常学級における特別支援教育に対するOTの介入の内容と特徴を明らかにしている。その中で、学校OTは、学校の文脈で評価し、間接的介入に重点を置いて関わる必要があるとして、コンサルテーションの重要性を述べている。このように幼稚園や保育園、学校におけるコンサルテーションに関する研究はみられるが、OTが児童クラブでコンサルテーションの効果を検証した研究はほとんど見当たらない。その効果を検証することにより、児童クラブにおける発達障害児などの発達上の課題を有する児（以下、発達の気になる子ども）への適切な対応が明らかになり、実践に役立つと考えられる。

本研究では、OTが児童クラブの支援員に対してコンサルテーションすることによって、発達の気になる子どもの感覚面の偏りや問題行動、目標到達度がどのように変化するか、介入前後（開始時と終了時）を比較検討し、コンサルテーションの効果을明らかにすることを目的とする。

## II. 方 法

### 1. 対 象

OTがコンサルテーションの対象としたのは、岡山県内A市、B市、C市の児童クラブに所属する支援員5人であった。また、小学校1～4年生の児童15人も対象児とした。

### 2. 実施期間と訪問頻度

3人のOTが岡山県内の4つの児童クラブに対して、6か月間に約2か月に1回の頻度で合計3回訪問した。OTの経験年数は、研究責任者が18年目、共同研究者2人はそれぞれ10年目、8年目であった。

### 3. 介入方法

OTは訪問時に支援員から対象児の困りごとを聞き、情報収集を行い、対象児の様子を観察した。観察後、話し合いの場を設け、観察によるアセスメントと支援方法を提案した。それに加えて、開始時のアセスメントとして、後述する3つの指標を用いた。訪問後、10日以内に対象児の特性と支援方法をまとめた報告書を送付し、それをもとに支援員が実践した。OTのアドバイス内容については、対象児個々のもつ特性や置かれた人的・物的な環境によっても影響を受けやすく、個人によって状態は異なるため、支援員へのアドバイス内容は個別性が高くなることが予測された。そのため、統一した助言のプロトコールは準備しなかった。6か月後、同一の支援員が開始時と同様の指標を用いて再評価を行った。

3つのアセスメントの指標として、日本版感覚プロフィール短縮版（Short Sensory Profile；以下、SSP）、日本語版アイバーグ子どもの行動評価尺度（Eyberg Child Behavior Inventory；以下、ECBI）、ゴール達成スケールリング（Goal Attainment Scaling；以下、GAS）を用いた。SSPは日本版感覚プロフィール（Sensory Profile；以下、SP）の短縮版であり、子どもの感覚刺激に対する反応を評価するもの<sup>7)</sup>である。児童クラブは、1部屋に何人もの児童が生活しており、個人のスペースが限られている。長期休暇ではそのような中で1日中過ごさなければならない。感覚に過敏さのある児童にとっては非常に過ごしにくい環境であり、ストレスが高まり問題行動につながっていると考えられた。そのため、子どもの感覚の特性を知る必要があると考えた。ECBIは子どもの行動上の問題と養育者の育児困難感を同時に評価するもの<sup>8)</sup>である。本来、ECBIは養育者がチェックするものであるが、本研究では支援員に評価を依頼した。児童クラブは保護者が労働等により昼間家庭にいない子どもに対して適切な遊びと生活の場を与え、健全な育成を図るといった役割を担っている。つまり、保護者の代わりに育児をしていると考えられた。また、支援者の育児

困難感を図る検査で、簡便かつ数値化できるものがなかったため ECBI を使用した。SSP と ECBI は OT が各評価の特徴や評価方法を説明したうえで、子どもに関わった支援員が評価をした。終了時も同一の支援員が評価をした。GAS は期待した目標に達しているかどうかについて数値化して評価するものであり、目標を段階づけるものである。GAS は高度に個別的な評価スケールを作成することができる<sup>9)</sup>とされており、発達障害のある子どもの個別化された目標の進捗状況を評価し、比較できるツールであるため GAS を使用した。OT は支援員に対して児になってほしい姿を聴取した。各目標のスマールステップについて、OT が案を作成し、支援員に提示し、段階設定が実現可能かについて協議した。目標設定により、支援員は先の見通しが立ち、子どもに対応しやすくなると考えられた。

#### 4. 統計学的解析

統計処理を行った数値は、開始時と終了時ともに、SSP スコア、ECBI (強度スコア)、ECBI (問題スコア)、GAS の T 値である。統計処理は、R i386 3.5.1 を使用して、Wilcoxon 符号付順位和検定にて行った。また、効果量も算出<sup>10)</sup>した。

#### 5. 倫理的配慮

研究の実施に際し、川崎医科大学附属病院の倫理委員会の承認 (承認番号: 2745) を得た。支援員は発達の気になる子どもの対応に関して困難感を抱いており、筆者が支援員に対して専門的なアドバイスを必要があるため、支援員 5 人を対象とした。そのため、対象児の観察・評価を行う支援員に対して口頭にて説明した。また、支援員が対象児に関わることによって、対象児の発達が促されると考えられた。そのため、筆者は保護者に対しても口頭にて説明した。子どもへの同意は保護者がその代諾者となった。また、本研究への参加については自由意思に基づく同意を文書の形で得た。あわせて同意撤回書を用意し、研究のどの段階でも同意撤回が可能であること、さらにそれによって不利益を受けることがないことも説明した。また、支援員との対象児の情報のやり取りは、A、B、C などとし、個人が特定できないように工夫した。児童クラブの利用者に向けた説明については、支援員から利用者に対して本研究についての告知をもらった。

### Ⅲ. 結 果

#### 1. 支援員の属性

研究対象児を担当する支援員は 5 人であった。a クラブの支援員は 2 人、1 人は 30 歳代前半、もう 1 人は 30 歳代後半、経験年数はそれぞれ 9 年目、7 年目であった。b クラブは 1 人、50 歳代前半、経験年数は 16 年目であった。c クラブは 1 人、20 歳代後半、経験年数は 7 年目であった。d クラブは 1 人、50 歳代前半、経験年数は 6 年目であった。各支援員は放課後児童支援員の資格を持っていたが、過去に発達の気になる子どもに関連した業務に従事した経験はなかった。自治体や民間団体が主催する発達障害児への対応研修を受講していた。支援員数は 1 クラス当たり 3 ~ 5 人での運営であった。

#### 2. 対象児の属性

支援員から見て発達が気になったり、対応に悩んだりしている子どもを対象児とした。また、保護者に対象児として挙げることの同意を得ている子どもとした。相談事例の内容としては、行動面では注意集中が難しい、癇癪を起こしやすい、多動である、感覚面では感覚過敏がある、対人面では他者と適切な関わりを持つことが難しいなどが多かった。対象児童数は 15 人 (男児 13 人、女児 2 人)、発達障害の診断のついている子ども 5 人 (自閉スペクトラム症 (ASD) 3 人、注意欠如・多動症 (ADHD) 1 人、言語発達遅滞 1 人)、そのほかは、発達障害の診断はついていないが、発達の気になる子ども 10 人であった。そのうち 4 人は幼児期に療育経験のある子どもであった。小学校 1 ~ 4 年生で、平均年齢  $8.2 \pm 1.1$  歳であった (表 1)。

#### 3. 統計処理の結果

コンサルテーション開始時と終了時の比較では、SSP の合計点は、終了時が有意に低下した ( $p < .01$ ) (図)。ECBI の強度 T スコアと問題 T スコアにおいても、終了時が有意に低下した ( $p < .01$ ) (図)。GAS の T 値においては、終了時に有意に上昇を認めた ( $p < .01$ ) (図)。GAS の T 値が 50 以上であれば、期待以上の成果が得られたことを意味している。

効果量について、芝ら<sup>11)</sup>によると、効果量は「測定単位にたよらない指標となっている。そのため、効果量を用いれば、単位の異なる変数を用いた研究の間で

表1 支援員・対象児の情報

自治体	クラブ	支援員数 (人)	全児童数 (人)	児童数 (人)	対象児童数 (人)	学年	性別	診断名	療育経験		
A市	a	正規1 補助員2~3	90	48	5	2	男	なし	—		
						2	男	なし	—		
						2	女	ASD	—		
						3	男	ASD	幼児期		
						3	男	なし	—		
		正規1 補助員2~3				1	男	なし	—		
						1	女	なし	—		
B市	b	正規3 補助員1	237	48	3	2	男	なし	幼児期		
						2	男	なし	幼児期		
						4	男	ASD	—		
	c	正規1 補助員2~3				170	36	1	1	男	ADHD
C市	d	正規2	38	22	2	2	男	なし	幼児期		
						2	男	なし	幼児期		
		正規2				16	1	4	男	言語発達 遅滞	—

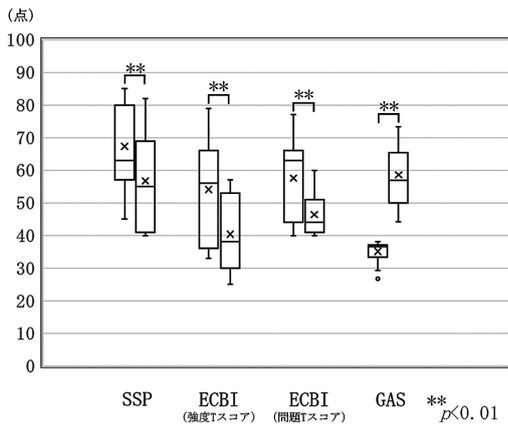


図 各検査の開始・終了時の中央値を比較

SSP, ECBI (強度Tスコア), ECBI (問題Tスコア), GASのT値の開始・終了時の中央値を比較している。

も、実験条件の効果の大きさを互いに比較することができる」と定義されている。水本ら<sup>12)</sup>がCohen'sの効果量の目安として、効果量小は0.1, 中は0.3, 大は0.5とし、効果量の大きさを検討した。その結果, SSP, ECBI, GASのすべてにおいて効果量大という結果であった(表2)。

4. SSPにおける開始時と終了時の変化

対象児の感覚特性を見るために, SSPのセクションごとに「平均的」, 「高い」, 「非常に高い」の領域のうち, 対象児がどの領域に分類されるのかについて調べた。その結果, 開始時では「高い」, 「非常に高い」の合計人数が多い順に聴覚フィルタリング, 低反応・感覚探求, 低活動・弱さ, 触覚過敏性であった。終了時では味覚・嗅覚過敏性以外は人数が減少していた(表3)。

5. ECBIにおける開始時と終了時の変化

強度スコアは, 対象児にどのくらいの頻度で問題行動が起きているかを評価している。問題スコアは, 対象児の行動が支援員にとって問題と思うかどうかを評価している。強度スコアにおいて開始時と終了時の比較をすると, 「すぐに注意散漫になる: 76点→51点」, 「一つのことに集中するのが苦手: 70点→34点」, 「活発すぎる, または, じっとしてられない: 67点→43

表2 本研究の開始・終了時の比較とサンプルサイズ(人数)

検査項目	開始時	終了時	p値	効果量(r)	サンプルサイズ(n)	
	中央値(点)	中央値(点)				
SSPスコア	63	55	0.00458	0.67	15	
ECBI	強度Tスコア	56	38	0.00201	0.74	15
	問題Tスコア	63	44	0.00122	0.78	15
GASのT値	37	57	0.00006	0.99	15	

表3 SSP セクションごとの領域別人数分布の上位項目 (開始時と終了時)

	セクション	平均的 (人)		高い (人)		非常に高い (人)		「高い」・「非常に高い」の合計 (人)	
		開始時	終了時	開始時	終了時	開始時	終了時	開始時	終了時
1	聴覚フィルタリング	3	10	7	4	5	1	12	5
2	低反応・感覚探求	5	8	9	6	1	1	10	7
3	低活動・弱さ	6	10	7	2	2	3	9	5
4	触覚過敏性	10	12	4	3	1	0	5	3
5	動きへの過敏性	12	14	3	1	0	0	3	1
6	味覚・嗅覚過敏性	13	12	1	3	1	0	2	3
7	視覚・聴覚過敏性	13	14	1	0	1	1	2	1

表4 GAS の例 (A 児の場合)

		①支援員と良好な関係をつくること できる (重み: 3×2)	②支援員の指示に耳を傾けること できる (重み: 2×2)	③自分の思いが通らなくても も暴言を吐かない (重み: 1×3)
最も高いレベルの結果	+2	本児から関わりを求めて、3・4回/週程度、支援員のもとに来る	支援員の指示に対して、十分に耳を傾けることができる	自分の思いが通らなくても、全く暴言を吐かない
少し高いレベルの結果	+1	本児から関わりを求めて、1・2回/週程度、支援員のもとに来る	支援員の指示に対して、かなり耳を傾けることができる	自分の思いが通らないと、わずかに暴言を吐く
期待される結果	0	支援員が声を掛けると、3・4回/週程度、支援員と関わる ことができる	支援員の指示に対して、ある程度耳を傾けることができる	自分の思いが通らないと、わりと暴言を吐く
少し低いレベルの結果 (ベースライン)	-1	(ベースライン) 支援員が声を掛けると、1・2回/週程度、支援員と関わる ことができる	(ベースライン) 支援員の指示に対して、少しは耳を傾ける ことができる	自分の思いが通らないと、かなり暴言を吐く
最も低いレベルの結果	-2	支援員が声を掛けても、毎日、支援員と関わりを持とうとしない	支援員の指示に対して、全く耳を傾けることができない	(ベースライン) 自分の思いが通らないと、いつも暴言を吐く

十分に : 100%~81%      全く : 20%~0%  
 かなり : 80%~61%      わずかに : 40%~21%  
 ある程度 : 60%~41%      わりと : 60%~41%  
 少し : 40%~21%      かなり : 80%~61%  
 全く : 20%~0%      いつも : 100%~81%

点」, 「自分のやり方が通らないと怒る: 62点→44点」, 「飽きっぽい: 59点→39点」であり、いずれの項目も素点合計は低下していた。また、問題スコアにおいても、ほとんどの項目で強度スコアと同じような項目が挙げられ、終了時ではいずれの項目も素点合計は低下していた。「すぐに注意散漫になる: 10点→3点」, 「一つのことに集中するのが苦手: 10点→2点」, 「自分のやり方が通らないと怒る: 9点→5点」, 「課題や計画を最後までやり通さない: 9点→1点」, 「活発すぎる、または、じっとしてられない: 9点→1点」であった。

6. GAS の開始時における目標設定

GAS は、1 対象児につき、2~3つの目標を設定した。表4にA 児の例を示す。全体的な傾向を見ると、

他者との関わり、行動面に関係する目標が多かった。他者との関わりでは、「自分の気持ちを他者に伝えることができる」, 「他児との関わりを増やす」などが多かった。行動面では、「自立した行動がとれる」, 「クラブの中でお手伝いができる」, 「他児・支援員を困らせる行動をしない」などが多かった。そのほかにも、遊び、学習面、母親の負担軽減に関する目標もみられた。

7. 開始時の OT のアドバイス

表5は、開始時の報告書から OT の支援員に対するアドバイスを整理・分類したものである。「言語化・適切な行動の促し」, 「役割の提供」, 「得意を活かす」, 「環境設定」, 「必要な感覚刺激の提供」に関すること

表5 開始時のOTのアドバイスの具体例

項目	アドバイスの具体例
言語化・適切な行動の促し	自分の気持ちを言語化する・代弁する, 状況の振り返りをする, 適切な行動を教えたり考えてもらう
役割の提供	お手伝い, 当番活動, 行事での進行役の依頼
得意を活かす	工作でクラスの役に立つ物を作る, 虫取り, けん玉やトランプ
環境設定	段ボールで仕切りをする, 壁に向かって学習する, 棚やかごを利用して物を定位置に置く
物の活用	チェックリスト, 感触グッズ, イヤーマフ, 表情の絵カード
必要な感覚刺激の提供	触覚・固有感覚・前庭感覚の欲求を満たす遊びを提供する
活動・人との関わりの段階づけ	活動の工程を細かく分ける, 対象児が関わられる人を徐々に増やす
対象児に合った声掛け	頑張ったことを具体的に褒める, 指示は具体的に伝える, している行動を言語化する
保護者への声掛け	保護者の悩みを聞く, 子どもの良い面を母親に伝える

が多かった。

OTは、支援員が用いる活動や対象児への支援の意味付けを行った。たとえば、「得意を活かす」では、自信を失っている子どもに対して、児の得意な活動を提供することで自信づけができることを説明した。また、すでに行っている支援で、OTから見てよいと感じた支援は、支援員に対してその支援のあり方でよいことを伝えた。

#### 8. 支援員の感想

OTコンサルテーションを受けた支援員の感想として、「子どもの行動の原因を知ることができた」、「子どもの具体的な支援方法を知ることができた」、「OTの専門性に基づく、新しい視点の話を聞くことができた」との感想が挙げられていた。OTからの肯定的なフィードバックが支援員の自信にもつながったようである。OTコンサルテーション後の支援員の保育実践の内容では、OTのアドバイスを参考にして、「子どもの特性を理解した対応を心掛けた」、「支援員と対象児、対象児と他児との関係づくりをした」、「感覚欲求を満たすように関わった」、「叱らずに、適切な行動を具体的に伝えた」、「トラブル時、支援員と対象児とで振り返りをした」、「役割を持たせるなど褒められる機会をつくり、しっかりと褒めた」など、支援員によってさまざまな感想がみられたが、支援員は子どもへの関わり方を変えようと意識した様子がみられた。

OTは3人の子どもに対してイヤーマフの支援についてアドバイスをした。そのうち1人に対して実際に支援が行われ、宿題時間に集中できるようになった。段ボールの仕切りについては、2人の子どもに対して

アドバイスをした。そのうち1人に対して支援が行われ、宿題に取り掛かるまでに時間が掛からなくなってきたり、宿題をするときに、集中できるようになったりした。最終的には、段ボールで仕切らなくても集中できるようになった。

#### IV. 考 察

OTが児童クラブの支援員に対してコンサルテーションすることによる効果について、感覚面の偏りや問題行動、目標到達度にそれぞれSSP, ECBI, GASを指標として、開始時と終了時で比較検討した。

SSPの合計点は、開始時と終了時で有意差を認め、かつ効果量も大であった。また、ECBIの強度Tスコア・問題Tスコアの合計は、ともに開始時と終了時で有意差を認め、かつ効果量も大であった。これは対象児の感覚の偏りや問題行動がOTのコンサルテーションにより軽減したことが示唆された。SSPの開始時では、聴覚フィルタリングのセクションにおいて最も得点が高かった。Dunn<sup>7)</sup>は、このセクションに困難さを抱える場合、音に過敏であるか、音に対する反応が鈍くなるなど、入力された音情報の調整に問題があると述べている。SSPにおいて、子どもの聴覚フィルタリングの得点が高いということは聴覚情報を受け取りやすい状態であると考えられた。ECBIの開始時では、強度スコア・問題スコアにおいて「すぐ注意散漫になる」、「一つのことに集中するのが苦手」の項目の得点が高かった。これは音刺激の調整が上手くいかず、周りの刺激に気が散りやすい状態であり、注意集中が困難となっていると考えられた。このような子どもに対する実践例として、支援員はイヤーマフや仕切りな

どの環境設定をした。その結果、終了時には、聴覚フィルタリングの得点が低下した。支援員の感想では、「子どもの行動の原因を知ることができた」、「子どもの具体的な支援方法を知ることができた」などが挙げられており、支援員はOTの解説により子どもの特性について理解を深めることができたと考えられた。このようにOTは感覚特性と行動とのつながりを考えることができる。これにより、支援員は対象児の感覚の特性に合わせた支援を実施することができたと考えられた。

GASにおいても、開始時と終了時で有意差を認め、かつ効果量も大であった。これは開始時の目標が達成されたことを示唆していると考えられた。仲間ら<sup>13)</sup>は学校支援において、コンサルテーション的な介入では必然的に介入頻度が少なくなるため、教員のモチベーションを高い状態で維持するために、GASなどによる書面の工夫が必要であるとし、GASの有用性を述べている。今回、OTとともに支援員がGASを用いて、目標を視覚化し、段階づけることで、目の前にいる対象児がどういう状況にあるのか、どこを目標にして支援を行えばよいのかについて、ともに理解することができたと考えられた。そして目標を明確化することで、支援員は支援の方向性を理解できたと考えられた。仲間ら<sup>14)</sup>は、チームで関わる際の「目標設定と共有」は、何に焦点を当て、何のために取り組むのかという目的をチームで共有することが、方向性を示すために重要であると述べている。対象児を中心として、支援員とOTとでチームを形成し、支援員は目標をOTと共有しながら対象児と関わる中で保育を実践でき、終了時には目標を達成することができたと考えられた。

支援員の感想の一部には、保護者の感想も書かれており、OTのアドバイスにより、子どもの特性を知ることができ、無理をしなくてもよいことを知り、子どもとの関わりに心の余裕が持てた。OTの訪問回数が重なるにつれ、児童が落ち着き、保護者は喜んでいたとの感想がみられた。このように保護者にとっても、コンサルテーションは間接的な効果がみられたと考えられる。OTは訪問時、子どもの得意とする作業活動や子どもの状態に見合った役割に焦点を当て、子どもの健康的な部分を引き出すように提案した。ある事例は、支援員が子どもの得意な作業活動を聞く時間を持ったことで、子どもの暴言や不適切な行動が軽減し、支援員に対してきちんと挨拶ができるようになった。

また、支援員の関わり方が変化し、ある子どもは上手くできたことを支援員に伝えるといった様子が見られたとの報告があった。このようにOTは子どもの作業活動に焦点を当てることにより、支援員と子どもとの関係性に改善がみられ、子どもは児童クラブでの生活が過ごしやすくなったと考える。

この研究の限界は、1つ目には、1クラブの対象児が多く、データに偏りがみられることである。また、発達障害の診断のない子ども、ASD・ADHDの診断がある子どもなど、対象の等質性が十分でないことが挙げられる。2つ目には、GASの目標設定は、開始時に支援員から出た課題のみに限られていることである。実際、継続してコンサルテーションを行っている、開始時の目標は到達されても、支援員からは新たな課題が出てきた。今回、途中から新たに出てきた課題についてはGASの目標として挙げていない。3つ目には、OTがコンサルテーションを行わない群を対照群として比較検討することは、施設や対象児等の協力が得られれば可能である。しかし、今回のコンサルテーションの効果はOTや支援員自身の力量にもよるので一般化して論ずることはできないと考えられる。本事業は、単年度であり、対照群を設けるには、期間が短く困難であると考えた。今後、経年的に研究を実施する機会があれば、対照群を設け、その群に割り当てられた児童クラブは、次の年度ではコンサルテーション有群にして、公平性を保つことが必要である。4つ目には、今回、子どもに関わった支援員が評価したため、バイアスが発生した可能性がある。今後は評価者を別に置くなど、盲検化の手続きが必要であると考えられる。5つ目には、本研究ではGASは子どもの行動の変化の指標として用いたが、支援員自身の変化に対する指標ではなかった。今後、支援員の子どもへの関わりがどのように変わるのか、支援員が子どものためにどのような環境設定をつくるのかなど、GASを用いて目標を設定したい。

## V. ま と め

今回、児童クラブにおいてOTのコンサルテーションの効果を検討した。OTが児童クラブで支援員に対してコンサルテーションを行うことによって、対象児の感覚面の偏りや問題行動が軽減することが明らかになった。また、開始時に対象児ごとに立てた目標がそれぞれ到達できていた。今後の課題として、対象児童

数を増やして効果を検証する必要がある。また、OTのアドバイスの中の、どのような要因が支援員の保育実践に影響を与えたのか、その関連についてテキストマイニング<sup>15)</sup>といった手法で分析をするとよいと考えられる。OTがコンサルテーション後に作成する児童クラブへの報告書と支援員の保育実践の記録などを用いて、質的なデータをその手法にて定量化し、関連性を分析することができると考えられる。そのような可能性も踏まえて、今後、研究の手法について多角的に検討していきたい。

第52回日本作業療法学会（2018年9月8日）にて発表した。

研究資金は、平成29年度岡山県備中県民局協働事業（岡山県学童保育連絡協議会主催）により、事業費から10万円支出された。

利益相反に関する開示事項はありません。

## 文 献

- 1) 厚生労働省編. 放課後児童クラブ運営指針解説書. 東京：フレーベル館, 2017.
- 2) 厚生労働省. “放課後児童クラブ関連資料” [https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu\\_Shakaihoshoutantou/0000184120.pdf](https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000184120.pdf) (参照2020-01-17)
- 3) 小林隆司, 伊藤祐子, 石橋 裕. 学童保育における障害をもつ児童の受け入れ状況とリハビリテーション専門職による支援ニーズ～岡山県2015年度アンケート調査より～. 作業療法 2017; 36 (1): 109-112.
- 4) 岡山県学童保育連絡協議会. 『「地域で、チームで、長い目で」学童保育を核に、発達障害があっても自分らしく暮らせる備中地域づくり事業』報告書. 岡山県学童保育連絡協議会, 2016.
- 5) 山口清明, 奥津光佳, 長山洋史, 他. 幼稚園・保育園でのコンサルテーション型作業療法の効果検証に向けた試験的研究. 作業療法 2018; 37 (2): 145-152.
- 6) 引野理絵, 土田玲子. 特別支援教育における学校での作業療法に関する研究—小学校通常学級をモデルとして—. 作業療法 2010; 29 (5): 577-586.
- 7) Dunn W. 辻井正次日本版監修, 萩原 拓, 他. 日

本版感覚プロファイル ユーザーマニュアル. 東京：日本文化科学社, 2015.

- 8) Eyberg S, 加茂登志子. 日本語版 ECBI アイバーク子どもの行動評価尺度 使用マニュアル. 東京：千葉テストセンター, 2016.
- 9) 高橋秀寿監修, 問川博之編. 小児リハビリテーション 評価マニュアル. 東京：診断と治療社, 2015.
- 10) “効果量を計算できる統計ソフト” <http://www.mizumot.com/stats/effectsize.xls> (参照2020-01-20)
- 11) 芝 祐順, 南風原朝和. 行動科学における統計解析法. 東京：東京大学出版, 1990.
- 12) 水本 篤, 竹内 理. 研究論文における効果量の報告のために—基礎的概念と注意点—. 英語教育研究 2008; 31: 57-66.
- 13) 仲間知穂, 松村エリ, 上江洲 聖, 他. 保育所等訪問支援における巡回型学校作業療法. 作業療法 2018; 37 (4): 427-433.
- 14) 仲間知穂編. 学校に作業療法を「届けたい教育」でつなぐ学校・家庭・地域. 京都：クリエイツかもがわ, 2019.
- 15) 小木しのぶ. テキストマイニングの技術とその動向. 計算機統計学 2015; 28 (1): 31-40.

## 〔Summary〕

The authors examined the effect of an occupational therapist's (OT) consultation with an after-school child support worker on sensory bias, problem behavior, and goal attainment in children suspected of having developmental disabilities.

Fifteen children in an after-school children's club were visited by an OT for a total of three visits approximately once every two months over a six-month period. The Japanese version of the Short Sensory Profile (SSP), the Japanese version of the Eyberg Child Behavior Inventory (ECBI), and the Goal Attainment Scaling (GAS) were used as indicators. The children were cared for by an after-school child support worker based on the advice of an OT, and reassessed by an OT.

The total SSP score was significantly lower at the end of the consultation than that at the beginning of the consultation; ECBI intensity T-scores were also significantly lower at the end of the consultation; GAS T-scores were significantly elevated at the end of the

consultation.

When the OT explained the causes of the target children's problematic behaviors and clarified the goals, the support staff was able to tailor the child's care to the child's characteristics, reducing sensory bias and problematic behaviors, and improving goal achievement.

It was considered effective for the occupational

therapist to consult with the support staff. We need to increase the number of subjects and consider randomized controlled trials in the future.

---

[Key words]

after-school children's club, consultation,

developmental disorders, occupational therapist